

23区 廃プラスチック焼却で ぱり急増する!

ダイオキシンの排出も?

石原慎太郎都知事は地球温暖化対策に極めて熱心だ。「国は動きが鈍い。東京は切り込み隊長」

国に先駆けて、大規模事業所を対象に二酸化炭素(CO₂)排出削減を義務化する方針を固め、来年度中に条例改正をめざす。また、世界約40都市が参加して温暖化対策などを話し合う「世界大都市気候変動グループ」の会議を今秋、都内で開くことも表明した。

だが、都のCO₂排出削減策と逆行するかのようによ、CO₂の大量排出が行われようとしている。

東京23区は、今年4月から不燃ごみとして扱ってきた一般家庭から出る廃棄プラスチックの焼却処分を本格的に始める。これまでも一部で焼却していたが、4

「不燃ごみから可燃ごみへ」。東京23区が廃棄プラスチックの焼却を4月から本格的に始める。それでも地球温暖化につながる二酸化炭素は少ししか増えないというのだが、その試算には疑問の声がある。温暖化対策に強い意欲をみせる都知事は、この矛盾にどう答えるだろうか。

月からは約半数の区で、残りの区では来年度中に、可燃ごみとして回収を始める。都で可燃ごみと不燃ごみの分別収集が始まって35年。23区の清掃事業は大きな転換期を迎えている。

「不燃ごみの最終処分場は都の管理だが、ごみの収集は各区が独自に行っており、焼却など中間処理は23区が共同で設立した「東京二十三区清掃一部事務組合(清掃一組)」が担っている。

科学的根拠なきCO₂排出試算

プラスチックを大量に焼却すれば、温暖化につながるのではないかと。当然の疑問に対し、清掃一組は06年6月、廃プラスチック焼却実施による温室効果ガスの排出量の変化を試算している。

これによると、廃プラスチックによってCO₂は約16.6万ト増加する。だが一方、埋め立て地から発生するメタンガス(CO₂換算)は、生ごみなどが付着した廃プラスチックの埋め立てを減少することで約9・6万ト抑制し、廃プラスチックによる発電で電力会社のCO₂発生を約6・

3万ト抑制する。このため温室効果ガス全体では約0・7万トの増加にすぎない、という。

「一部の区ですでに始まった廃プラスチックによる排出量を省いて試算しています。リサイクルに回る廃プラスチックも多くなると予測しました」(清掃一組総務部企画室)

この試算について、専門家はどうみているのか。国立環境研究所循環型社会・廃棄物研究センターの森口祐一センター長は、メタンガスの抑制でCO₂増加量を相殺する論理に疑問を唱える。

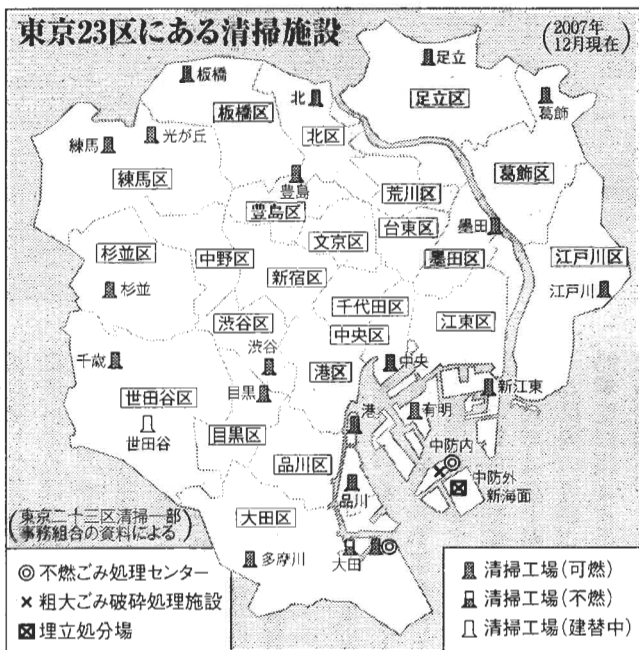
「プラスチックの埋め立てを減らした場合に、メタンガスがどの程度抑制できるのかという研究は十分には行われておらず、相殺効果があるかを示すことは困難です」

清掃一組にメタンガス抑制の根拠を尋ねると、耳を疑う回答が返ってきた。「メタンガスを削減できる」という科学的根拠はありません。この試算は学術論文

すでに廃プラを燃やしていた大田清掃工場(左)。23区の不燃ごみが集まる中央防波堤外側埋立処分場(中央)

石原知事 知っていますか?

CO₂はやつ



などをとに、われわれの考え方に基づいて試算したものです」(総務部企画室)

清掃一組は自らの試算に科学的な根拠がないとあっさり認めたのだ。

さらにこんな話もある。NPO法人「ごみ問題5市連絡会」の青木泰事務局長が指摘する。

「廃プラ焼却が決定したのは05年10月に開かれた特別区長会ですが、このとき清

掃一組は別の試算を示し、廃プラ焼却によって温室効果ガスの増大はないと説明し、各区長の賛同を得ています」

このとき清掃一組が提示した温室効果ガス排出量の試算は、廃プラ焼却によりCO₂は約20・5万ト増加するが、メタンガスは約14・7万ト抑制し、電力会社のCO₂発生は約5・3万ト抑制。差し引き温室効果ガス全体では約0・5万トしか増えないというものだった。

青木氏はこの清掃一組の試算にも懐疑的だ。

「清掃一組は08年度に可燃ごみが約26万ト増えるという計画を立てた。この数字から環境省の算定値(廃プラ焼却量の2・69倍のCO₂が発生)で計算すると、CO₂は約70万ト増える。彼らが説明するようにCO₂が20・5万トしか増えないなら、7万ト8万トしか廃プラを燃やさない計算になる」

清掃一組の試算には、さらにおかしな点がある。05年の試算より、06年の試算

のほうが廃プラ焼却量は減り、CO₂増加量も減っているが、発電による電力会社のCO₂抑制量は増えている。廃プラ焼却を減らせば、電力も減るのではないか。

清掃一組に理由を尋ねたが、「(05年の試算は)当時の数字をベースに試算したので、現時点に比べて試算の精度が落ちてくるかもしれないが、試算自体は間違いではない」(総務部企画室)

結局、明確な根拠は何も示してはくれなかった。これでは、自分たちに都合のいいような試算をして、温暖化への影響をごまかしていると批判されても仕方がないのではないか。メタンガスの影響や電力の抑制が試算どおりにいかなければ、廃プラ焼却でCO₂は急増するはずだ。

廃プラ焼却によって生じる問題は、CO₂の排出だけではない。

そもそもプラスチックが不燃ごみとされているのは、ダイオキシンの発生も原因の一つだった。現在、廃プラ

ラ焼却の流れができたのは、ダイオキシンの発生・排出を抑える清掃工場の施設が確立し、環境に影響は出ないことが前提となっている。だが、清掃一組の関係者は、匿名を条件に清掃工場の実態を語った。

「大田第二清掃工場（大田区）は、90年の稼働時から23区内の廃プラを焼却して来ました。ダイオキシンなどの有害物質が出ないような排ガス処理システムを持っているからです。が、実際には工場内部でダイオキシンが漏れているんです」

各清掃工場は「作業環境測定」と呼ばれる環境調査を年3回行っている。工場内部の粉塵を調べ、ダイオキシンに汚染されていないかなどを調査するものだ。

大田第二清掃工場では、01年から05年までの調査により、「炉室」や「塩化水素除去設備室」など複数箇所が、3段階評価で最も安全性に問題がある「第3管理区分」の指定を受けている。清掃一組が公表する排ガ

ス測定結果をみると、どの工場も排ガスに含まれるダイオキシンは基準値を下回っているが、大田第二清掃工場は、他の工場に比べて排ガス中のダイオキシンが突出して高い。

可燃ごみ減って焼却増の必要？

「問題があった個所では作業中には空気をホースで送るマスクをつけなければなりません。この期間に安全基準を超える高濃度のダイオキシンが排ガスに乗って外へ流れ出た可能性は否定できません」

環境総合研究所の池田こみち副所長は、「清掃工場による排ガス中のダイオキシン測定検査は穴だらけだ」と指摘する。

「検査は年2回で1回あたり4時間しか計測していません。しかもダイオキシンが出にくい焼却効率がよい時間帯で調べています。自主検査を義務付けた法律では、高い数値が出た場合、

再計測して低い結果を行政に提出すればよいなど抜け穴が多いのです」

そもそも廃プラ焼却の方針を決めた背景について、次のような見方もある。

廃プラ焼却問題に詳しい練馬区議会の池尻成二議員が解説する。

「23区内の可燃ごみは減少し続けているのに、焼却する清掃工場が多すぎることに背景にあります。空いている焼却施設を使おうと考えたのではないか」

23区内の可燃ごみ量は、95年度には251万3千トンドだったのが、その後、リサイクルや分別収集の徹底などで減少を続け、04年度は169万2千トと3分の1ほども減っている。

だが、119ヶ所の図のよう、23区内の可燃ごみを焼却する清掃工場は、建て替え中の世田谷清掃工場を含め、21を数える。焼却炉の稼働率をみると、06年9月には60・9%で、03年7月と比べて19・7ポイントも下落している。

中医学用語ミニ検定

【(五臓の)腎】って何？

ヒント アンチエイジングに関係あり。

答えは巻末グラビア頁に



日本中医薬研究会
イスクラ産業株式会社

世田谷区議会の竹村津絵議員は、「都内には安定稼働のボーダーラインとされる80〜85%を割り込んでいる無駄な炉が多すぎます」と指摘する。

このため、ある処分場関係者はこう言うのだ。「効率の悪い清掃工場でも、一部では建て替え計画があったり、整備計画などが進んでいる。つくってしまつた工場は動かさなければいけない。焼却量を増やす必要があったのです」

さて、都の環境政策と矛盾するような廃プラ焼却について、石原知事はどうか考えているのか。文書での質

問に対して、都からこんな回答が返ってきた。

「東京港に残された最後の埋立処分場を延命化するために、貴重な資源であるプラスチック廃棄物はできる限り原材料として再利用するとともに、汚れが付着しているなど、再利用に適さないものは、清掃工場で焼却し、発生した熱を効率的に回収し、発電等に有効利用していく」

質問したCO₂の排出については何も触れられていない。石原知事には、いつもの歯切れのいい答弁をいただきたいのだが。

本誌・金子哲士